



狭山アートキャンプ2014



絵画研究室 担当 寺田和幸
スタッフ

- 教員 寺田和幸 森原宏典
 助手 村井彩子
 学生
 3年 池本彩音 (代表)
 三滝美咲
 2年 石橋草花 相沢彩乃 山口瑞貴
 小松原絵理子 加藤くるみ 森安織
 船崎優衣 阿部ひかり 木村円香
 当日ボランティア
 1年 古屋真名 広田明日香
 谷ゆづな 宮城明佳

●●●●●
 木々に張り付けたペ
 スに水鉄砲などを射
 撃していく参加者

今年、特に参加型という点に重点をおいた。普段、絵を描く習慣が無い人、苦手な人も参加しやすいように、道具に工夫を加え、水鉄砲、スポンジなどを使用した。まず緑のなかに白い布が、存在することで生まれる不思議なコントラストの空間を味わってもらおう。その白い布が、自分たちの手で染まり、変わっていく様子を楽しみながら体験してもらおう。絵を完成させることではなく、こうした過程の楽しさを実感してもらいたいと思っていたが、実際に参加者の楽しそうな姿、終盤の真剣にとりくむ姿をみて、それが叶ったのだと嬉しかった。

今回のライブペイントは、はじめは二年生が中心になって積極的に企画を進めていた。何度も旗山キャンパスに視察に行き、素晴らしいプログラムを実行できた。関わってくださった方々に本当に感謝している。

造形表現学科 三年 池本彩音

過程を一緒に楽しむ

になると思われて、色こけて、少しドキドキさせられる作品にみえたのだ。一枚の絵が変わっていく姿に立ち会えたこと、一日中活動ができるアートキャンプならではの特典だったと思う。



ライブペインティング観感

今年、森のなかでのライブペインティングということで、支持体としての布地をどのように配置・設置するかを事前に試行錯誤し、鳩目の扱い方やロープワーク、風が強かった場合への配慮などの準備は、参加者にとって今後どこかで役に立つ経験となったのではないのでしょうか。テーマの設定や作品タイトルのキャプションの準備、描画用具と絵具の工夫などでは、こちらの想像をこえたアイデアの展開をみせてもらえました。ボランティアの一年生の積極的な関わり方もとても印象的でした。当日は学年をこえた交流から生まれる様々なアイデアや現場での工夫など、授業中とは違う屋外でのライブペインティングならではの皆さんの表情に、大きな画面に絵を描くことの楽しさと難しさを再確認いたしました。一年次からパランス良く様々な基礎科目の課題をこなして来た皆さんの、今後の作品制作の展開に限りない可能性を感じた二日間でした。

森原宏典 (非常勤講師)



音楽隊



各プログラム付近で皆が馴染みある曲を演奏し、聴いている人も手作りマラカスで参加できるように工夫した。



自然になじむ音

狭山キャンパスに練習に行ったとき、板橋キャンパスで行ったときとは違う響きを感じた。森のざわめき、風の音が自分たちの音となじみあっているのを五感で感じたのだ。このハーモニーを大事にしたいとメンバー皆が強く思い、「自然になじむ」という音楽隊の今年のコンセプトが決まった。

狭山キャンパスに合う曲を探しながら皆がジブリを思い浮かべていた。ギター、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、オカリナを使用し、狭山キャンパスのイメージに合わせてアレンジした曲を披露したところ、批判的にみていた先生にも納得してもらったことができた。ただのコピーではないことが伝わったのだと思う。

森の妖精

具体的なイメージとして決定したのは森の妖精。「森の妖精になりきって音楽に参加者に願ける」シーンは、ピジュアル的にも面白いと思った。羽をどうやって作れば良いか、上手く作れるか不安もあったが、沢山の人の協力もあって、順調に準備が進んだ。白い衣装が緑に映えて、思いのほか人の目を引くことができた。思い切ったこの衣装にしてよかった。

プログラムの近くに

私たちはプログラムの近くで演奏しては移動を繰り返した。アートのキャンパスでは、自然の音だけではなく、プログラムから発生する様々な音が存在している。色んな音が混ざり合う心地よさは、この場でなくては味わえない。また全てのプログラムが同じ場所で活動しているの、遠くのプログラムにもかすかな音をさりげなく伝えることができた。さつと自然になじんだ音色としてアートのキャンパスにアートを届けられたはずだ。音楽を表現することの新たな楽しさを知ることができた。

造形表現学科 三年 内海亜子

AC事務局 担当 押元信幸 スタッフ

教員 押元信幸 田中千賀子 宮岡雄
助手 橋見さなえ
学生
3年 内海亜子(代表)
橋本純 高橋美登 久保田祐美
1年 田代裕美 栗田結

橋見 「まさかのー！妖精でしたネ！」

宮岡 「でした！狭山の森に現れた癒し系バンド！」

橋見 「昨年からガラッと雰囲気変えてきましたねえ。」

宮岡 「ですな！前は橋見さんのアドバイスのおかげです。」

皆の気持ちを代表して言わせてください。
ありがとうございます！

橋見 「いえー、意外と物いで羽が仕上がりましたね。」

まさか音楽隊唯一のアートの時間？

宮岡 「確かに制作は工作という面ではアートな時間だったかもしれないですね。皆で時間を合わせて集まって相談したり練習したりしていた事がとても印象的。当日のライブではそれが発揮されていたと思います。」

橋見 「今年も！曲だけ参加させていただきました。」

宮岡 「橋見さんのヴァイオリンと音楽隊のセッションも素敵でした！」

橋見 「事前にコードを教えてもらって心の準備ができていたので楽しんで合わせる事ができたと思います。学年も違うなか、1人複数楽器を持って語り沢山のライブだったと思いますよー。見応えありましたね。」

宮岡 「はい！集まった皆さんにもマラカスで参加してもらって、

とても盛り上がりましたね！」

さん 「青春を思い出しました！ありがとうございました！」

宮岡雄(助教) / 橋見さなえ(助手)

自然になじむ



各プログラム付き
演奏し、聞いてい
参加できるように



●●●●●●
そうめんを流すこ
新たなつながり。

流しそうめん×アート

普通の流しそうめんのイメージに囚われ、アートをつなげることが難しかった。流すものを変え、竹に絵や色をつけることくらいしか考えられなかったが、レイン自体を工夫し、そうめんを飛ばしたら面白いのではないかとということになり、一年生が張り切って図案をつくってくれた。やりたいことを素直にのびのびやるように応援してくれる意見もあれば、「これはむずかしい」と苦言を呈す意見もあった。複雑な分岐があり、何メートルもあるレインを作れるか、予算も限られているなか沢山の竹を用意できるのか。たしかに少し不安になったが、めげずにプランを練り続けた。竹は、一般の人の好意で提供してく



▲ムッシュエビ天の装飾



4 そうめんのレイン設置

ここにしかない 個性的な具材



▲業務プログラムから提供された花の器

れることになった。私たちは、板橋キャンパスまで届けてくださった竹を、皆で割るところから始めた。道具を使うのに不慣れな一年生も夜遅くまで残って作業。そうめんを飛ばす仕掛けは、ほんの少し田に厚がすだけのわずかなものだが、試行錯誤を繰り返して、やっと成功に至ったものなのだ。

うどん、ミカン、クローロンキユウ

流すもの、トッピングももちろんこだわった。視覚的なアートを追求し、カラフルで涼やかなものを選んだ。そうめん以外に、うどん、みかん、寒天ゼリーでつくったクローロンキユウ、クローロンキユウは目玉などと呼ばれ、当日話題になった。これらの食材を考えるのは楽しく、沢山の案がとびかかった。天ぷら等も一緒に提供したかったが、さすがに無理だった。一年生が考案したマスコットキャラクター「ムッシュエビ天」だけが形を残し、レインの先端に装飾として使用された。

ひろがるつながり

流しそうめんは、沢山の人々に助けてもらったプログラムだ。相談ののってくださった本部の学生さん、竹を提供してくださった一般の方、レイン作りから準備まで手伝ってくれた一年生、

「から自由にプランをたてて、進めるなかで、こんなメンバーが集まり、皆さんに支えてもらえたことが嬉しい。アイトキヤンパでしかできない流しそうめんだった。」

造形表現学科 三年 澤本奈々子

食文化のなかのサブカルチャー

流しそうめんはいわゆる和食の王道ではない。調べてみれば食文化のなかのサブカルチャーである。料亭でそうめんはでも通常、流しそうめんはでて来ない。出汁がどうの何処そのそのめんが一番であるとかは二の次。どのようなシチュエーションであるかが、遥かに重要なのである。肝心のめんはおまけなのだ。クローロンキユウを流したのも自明の理である。新しくして学生たちの想いと知恵と協調と忍耐によって、そうめん達は森のなかを自由に楽しく流れたのだ。

加藤 幸 (卒業生)



▲クローロンキユウ



AC事務局 担当
スタッフ
教員 伊元信幸 加藤 幸
助手 田中知子
学生
3年 澤本奈々子 (代
橋田久美子 久
生野ひとみ
1年 朝比奈元 若井



北極のオーロラをイメージしたカーテン



木工ワークショップ



涼をふるまう 工削所

ゴロゴロしていた。
スペース周辺ではかき氷を皆で楽しむ姿が多くみられ、「こさスペースの居心地がよい」という声も多く頂いた。皆が集まれるアート空間が出来上がった。

わっていた。皆、昨年楽しかったから今年もやりたい、という気持ちで参加を決めたようだ。昨年は三年生が引継ぎしてくれた。三年生になると、あんなにできるんだ、という気持ちを抱いた。自分

がリーダーとして企画を進めるうちに、先輩がみえないところで努力しているのだと気づき、自分もあんなふうになると思うようになっていった。経験者が多かった一方で、はじめてスタッフとして参加してくれた七名の一年生に的確な指示を出すことが難しかった。アートキャンプ全体がもっている実は厳しい雰囲気と、一年生の期待していたものは、もしかしたら違うものだったかもしれない。でも私も最初は、楽しそう、ポイント買えるんだ、というノリで参加を決めたのだ。いつのまにかがつり回ってしまっていたことも、アートキャンプの魔力だと思おう。一年生もこの場を体験したことで、何かがひっかかり、これからの活動の刺激になってほしい。

造形表現学科 三年 諏訪編

住環境造形研究室 担当 中村精二
スタッフ
教員 中村精二 豊田聡 土屋裕三
助手 相見さなえ
学生
三年 諏訪編(代表)
井上あかね 寺嶋実希
土城夏実 立木実菜美
柳沢のぞみ
一年 鈴木桃雄 岸本花 坂本真央
鈴木阿都(二番員) 山谷まい
渡辺早希

一生懸命

しらくま工削所も三年目を迎えた。主体は三年生、初めてのことに挑戦は、恐る恐るの参加となる。この状況を少し怖く思う。緩やかな人の繋がりの場であるしらくまの伝統が、毎年リセットされる様に感じるからだ。ところが今年、昨年の経験者が多く参加してくれた。一年生の参加も未来につながる喜ばしい誤算だ。経験を話かし自主的にしらくまは動き始めた。空間デザイン・演出・メニュー作成まで全て学生たちの手で完成させた。

面白いことは、人に準備されたものより自分でみつけたずともっと面白い。だから自然と一生懸命になり、色々なことがみえ、気になることも増えてくる。思惑通りに進まず、イメージと違うことも面倒なことも沢山ある。彼女らはこの時間をのりこえ、しらくまを完成させた。この意味は大きい。穏やかな空間の伝統も継承された。「一生懸命は、意外と楽しい」ということに気づいてくれたならば嬉しい。この一生懸命の経験は、次なる懸命の場での自分の支えであり、スキルになる。

人が何かをやるのは本能のようなものだ。始まりは不意にやってくる。「面白そう」「おいしそう」「手をかりに人が集まり何かが起こる。これでもいいのだ。初めての人も勇氣を出して、学年の枠も乗り越えて参加してもらいたい。

豊田聡(非常勤講師)

カフェ

Art Cake



人と食とアート为主题とし、参加者が
食とアート両方を楽しめる空間を提供。



個性が生み出す

巨大アート

アートをたべる

アートの可能性をひろげたい。昨年のカフェプログラムは空間、インテリアのデザインと制作がメインだったが、今年は食そのものをアートの表現することこだわった。カフェのテイストはマリリン。熱いアートキャンプのなかに涼しげな空間をつくることにした。日に当たってキラキラ光るサンキャッチャーに、魚やセーラー服の模様を描いたガーランドを飾棚に装飾した。そしてメインは魚型のパンケーキ。参加者がデコレーションした色とりどりのクッキーを敷き詰めて、Art Cakeの完成だ。

Art Cakeが焼き上がるまで

最近、若者間でパンケーキが流行っているが、ただそれを作るだけではアートキャンプでやる意味がない。他ではできない大きなパンケーキをつくってみることにした。一枚で焼き上げるプランもあったが、形のアレンジのしやすさを考えて、正方形のものを大量に焼き上げ、並べることにした。

はじめは、パンケーキを海の絵にみたてて、それぞれのパーツの色づけを参



AC事務局 田中 研二 以下
スタッフ

責任 田中 研二 田中 千賀子

協力 柳見ゆき 藤村 直哉

学生

3年 田中 千賀

2年 渡邊 悠輔 (代表)

徳江 莉加 藤原 穂秋 赤沼 夏帆 大井 美咲

渡久 聖輝 田中 千賀



けるプランもあったが、形のアレンジのしやすさを考えて、正方形のものを大量に焼き上げ、並べることにした。
はじめは、パンケーキを海の絵にみたてて、それぞれのパーツの色づけを参

加者してもらおうと考えたが、それでは参加者の希望や個性を活かした表現ができなくなってしまった。そこで、参加者には自由にクッキーの上にアイシングしてもらい、それをウロコにみたてて、魚の形をしたパンケーキにデコレーションすることにした。

二年生を中心にチャレンジ

最初に集まったメンバーは、私を合わせた二年生三名だった。その後集まったメンバーを合わせても、昨年のアートキャンプにスタッフとして参加したのは一名だったので、不安は大きかった。それでもやり切ろうと思ったのは、昨年企画運営スタッフの中心にいた先輩が輝いていたからだ。実際にやってみても大変なことは多かったが、沢山の人のフォローをうけて、当日まで準備に助んだ。予想を上回る盛況で、自分も先輩に近づけたような気がした。

造形表現学科 二年 渡邊里穂



藤標でDECO
はじめての狭山キャンパスでのカフェプログラム。
二年生を中心としたメンバーと手探りで始まりました。
彼女たちの発想力で「みて」「たべて」「おいしい二日間を過ごすことができました。」

昨年度のカフェメンバーであった唯一の三年生が緑の下の力持ちとなり、先生がついていないながらもモチベーションを落とさずにやり遂げたのではと思います。

心配していた巨大パンケーキも、焼く練習を何度も重ねてコツをつかみ(たいへんおいしかったです)、当日は藤標の空間を彼女たちのセンスで涼しげな装飾を施し、夏の狭山キャンパスの憩いの場として花を咲かせていましたね!

二日目は、参加者による沢山のアイシングクッキーでトレイまではみ出るほどデコラティブな巨大魚に、すばらしいフィナーレでした。

相見さなえ(助手)



狭山キャンパスパズルズアー

れば、お声をかけていただければ幸いです。
環境教育学科 四年 眞井美穂



▲制作したパンフレット

AC事務局 担当 押元信幸 スタッフ

教員 押元信幸
片田真一 (環境教育学科)
安達順子 (染色研究室)
田中千賀子

学生
4年 眞井美穂 川口菜 安達奈
小澤枝里子 山口南都
榎本佳奈子 村田愛
3年 古田ちはる (代表)
眞原美穂
2年 渡邊麻由美



▲来場者のスケッチ

目標を達成するための行為

ある目的があり、それを達成するための「ある行為」を行う。この「行為」の効果を評価するために、どうすれば良いか? 何らかのモノサシを使って、その行為の前後と後とで「測定」を行い、その「値」を比較すれば良い。様々な測定方法がある、らしいです。

さて今年もアートキャンパスに参加させて頂きました。造形表現学科のなかからエコツアーに取り組みたいとの声があり、生物多様性研究室との協同で、お声をかけて下さった。昨年同様私どもの研究室を誘ってくれたこと、本当に有り難いと思います。今回もぼくはできるだけ口出しせずに学生たちの話し合いを見守りました。それにしても、アートキャンパス当日までの段取りは見事なものでした。節目ごとの補切りをはっきりさせながら、話し合い、一つずつ課題をこなしていく。この過程が「目標を達成するための行為」なんだなあ、さてその「効果」を評価するためには何をモノサシとして測定したら良い

だろう、などとアートキャンパスの種目とはややズレたことを考えているうちにあつという間にエコツアー本番を迎えました。

狭山の森は昔ながらのいわゆる武蔵野の面影を残した雑木林で、クヌギの樹液にはカナブンが集まり、伐採を免れ高く育ったコナラの樹元には、かわいい実生が「次は自分の番だ」と言わんばかりの顔で生えていました。草木をみながら散歩するにはもってこいの環境です。楽しくて、このときはモノサシのことはもうすっかり忘れていました。

学科教育強化の取り組みに、またしても私たちの研究室は便乗させてもらったというのが実情でしょうか。うちの学生たちは今年も沢山のことを経験しました。ありがとうございました。

片田真一 環境教育学科 講師





キャンパスにかける虹

「秩山キャンパスにハンモックの虹をかけよう！」
というキャッチコピーで、各色のハンモックに型の
違うステンシルで自由にデザインしてもらい、実
際に乗って体感してもらった。

ファイバー

体感型カラフル空間

昨年のメイポールをみたときから、
アートキャンパスを華やかにできるの
は、ファイバーしかないと思ってい
た。最初に集まったメンバーは私を入
れて二名だったが、どうしてもやっ
てみたかった。人手がなかなか集まら
ず、昨年と同じことをやるのは難し
い。木々を活かしてキャンパスを彩る
方法を思案するなかで、木に布を垂ら
したり、なびかせたりする案がでた。
ハンモックであれば、来場者が乗るこ
ともでき、空間作りだけでなく、使っ
て、身体で楽しめるプログラムになる
だろう。今年のオリジナルティとし
て、この「体感型」であることを大事
にすることにした。

いろいろな顔のステンシル

決められた形の型を使っても、混ぜ
具合や水の量、ステンシルする人に
よって変わるところがとても面白い
と思った。ステンシル用の染料を使っ
たことで分量など難しいところは
あったが、逆に塗りや色の出方などに
様々な表情がでて皆さんにも楽しん
でもらえたのではないかなと思う。



▲昨年のメイポール



▲ステンシルの道具と柄



▲ハンモックに貼したステンシル



キャンパ

「箕山キャン」に
というキャッチコ
違うスティンルで
間に乗って体感して



▲百年のメイボール



はじめてのハンモック

布自体は分厚い素材ではないのに、縫い合わせ補強をすることでこんなにも強度があがり強くなるのだと知り、布の力に驚いた。ハンモックに実際に乗ってもらって多かつた感想は、最初は乗れるのか不安だったが乗ってみると、気持ちよく揺られてとても良いというものだ。ハンモックからの眺めなども楽しんでもらえたようだった。自然に囲まれながらリラックスしてもらえたようで、眠っている人もいて驚いた。新しいことにチャレンジするなかで、やりたいことがどんどん出てきて、その都度先生が、実現するためのアドバイスと協力をしてくださった。そしてやれることもどんどん増えていった。例年通り、メイボールをやりたかったことも確かだが、今回ファイバープログラムの可能性をひろげることができたことを嬉しく思う。

造形表現学科 三年 山本支那

織物研究室 担当 荒川朋子

スタッフ

教員 荒川朋子

卒業生 尾方志子(染色研究室)

同本専 尾方志子(染色研究室)

学生 三年 山本支那(代表)

豊田崇洋美

新井美咲 青柳希



夢を乗せ続けたチーム

部屋の外に飛び出してアートの世界。私たちは、大自然をキャンパスに、布(色彩)を用いてどんな風に描こうか。参加者とともに風に聞かろうか。それにはどんなユニークなプログラムができるか。さてさて、

こうなると、学生にとつてはあまりにも無限の可能性を持ちすぎるが故の、なかなか手強いプログラムであったのでは、と思います。未知のワクワクした「超難問」にまっさらなところから挑戦するのですから、話し合いを重ねて、スタッフから様々なアイデアが生まれました。そこで選ばれたテーマは「虹」。お借りしたカタチは「ハンモック」。人の全体重を支えるという、安全面も考慮したものに「機能」が加わったことは更にプログラムのハードルをあげましたが、学生たちは目指す一つのゴールに向かって、根気よく、試作や試乗を繰り返し、よく取り組みました。チームで作り上げる心強さや苦労、楽しさも多かつたと思います。

当日のアクシデントも丁寧に乗り切りながら、最後まで虹色ハンモックに夢を乗せ続けた素晴らしいチームワークでした。本専にお疲れ様でした。無事に終えたこと、おめでとう!!

荒川朋子(講師)



鍛冶



ひろげる鍛冶

わたしたち鍛冶プログラムは他のプログラムとは違い、鍛冶アーティストと日本大学の学生の協力を得て、大人数でアートキャンパスに挑んだ。当日、体験者と一緒の一つのモニュメントのパーツをつくり、鍛冶体験してもらうことで、普段関わることなく、「難しいもの」「職人のする仕事」という先入観を払拭し、新たなイメージをひろげていくことをテーマとした。これが私たち鍛冶プログラムにとっての「ひろげるアート」であった。

ランプシェード

ランプシェードは夜の展示を想定し、明かりによる表現の面白さを活かすために、ランプシェードをモニュメントとして作ることに決めた。鉄の黒さとこのコントラストや、曲線の美しさが映えるところが想像できた。緻密な完成品もなく、手で組み上げていく即興の作品作りの面白さを大事にしたかった。体験者と一緒につくった渦巻きのパーツを、番線であらわして、接続していった。完成した形より、つくっている最中の面白さを、体験者が同じよう

に体感してくれていたら最高に嬉しい。

「できたこと」ができること

一日目の夜の相模のとき、時間が足りず、自分たちの予定していた作品が出来上がらないかもしれない、不安に思っていたときに、アーティストから「できたこと」ができること」という言葉をもらった。そのとき事前に「できた」ことを増やしてから、当日を迎えれば、もっとできることがひろげられたのかもしれないと思った。計画をたてるだけではなく、実際にやってみないと、自分たちに何が出来て何が出来ないのかわからない。なので、早めに計画を立てるだけでなく、前もって実際に体験して体得することが大切だと実感した。

鍛冶体験の意義

昨年も鍛冶プログラムに参加したので、今回で二回目の参加になるが、鍛冶は正直、熱いし、気がついていたら軽い火傷はいくつもしているし、ハンマーは重いし、難しいし、身体も気も減る仕事だと昨年から思っていた。しかし、夜にオレンジ色の鉄を大勢

の仲間に声をかけられながら叩くときの不思議な興奮がやみつきになって、今年も参加してしまった。あの感覚は鍛冶プログラムでしか味わえない贅沢で貴重な体験だ。アートキャンパスに来てくれた全ての参加者に、あの興奮をひろげられたらいいと思う。

造形表現学科 三年 木村史織



映像



駆け抜けろ

アートキャンプ1日目の最後のプログラム。事前に制作した映像と当日制作した映像を合わせてスクリーンに投影した。

走る

アニメーションは、そのまま「走る」がテーマだ。最後の画面で九つの異なるシーンを並び合わせたときに、アートキャンプのロゴにみえるようにすることが狙いだった。九つのシーンがつながって、ひろげることがコンセプト。これは昨年のアートキャンプのテーマ「つながるアート」と今年のテーマ「ひろげるアート」を意識している。各シーンの担当者が自由にテーマを決めたので、水族館や実、東京家政大学七号館など、場面設定にも個性がでている。これらのシーンをアフターエフェクトというソフトを使って編集するのが私の役割だった。

制作秘話①

計画表や次のミーティングまでに各学年にやってきてもらうことを記述した文書を印刷して配るなど、計画性をもって取り組むよう常に努力をした。まだ大学生活が始まって間もない一年生も指示通りに仕事をこなしてくれ、二年生は少ない人数であるのに大きなスクリーンを作ってくれた。

しかし、予想していたよりもずっと作業量は多く、アートキャンプの三日前に三年生の有志で泊まり込み、作業をしてもらうミニ合宿もあった。使用ソフトを私しか持っていないものだった

ので、動画としてまとめる作業分担ができず四日間の仮眠生活。当日は徹夜明けというとてもハードなアートキャンプを迎えた。

制作秘話②

実は映像プログラムは当日を目前にしてとある大きな技術的な壁にぶつかった。シーンを個々にみると面白いが、繋げるとどうも間が悪くみえてしまうというものであった。全体をつなげて通してみるまでその問題がわからなかったため、気づいたときにはもう本番目前という状態であった。当日も上映時間が遅れたことで余計に間を感じさせてしまう結果となり本当に悔しく思った。映像は難しいと改めて感じたときであった。それでも上映中に感嘆の声や笑いを耳にしたときはつくづくよかったと心から思った。

映像というツール

私は映像というツールは自己表現を一番忠実に表わしてくれるものだと考えている。それが誰かの目に届いたとき、自分の存在を認められたような気がするのだ。失敗は大きかったと思うが、きつと次に生かせるだろうと感じている。

今回はアニメーションという一秒にも満たないコマのためにとても神経を





映像 プログラム

2014年8月8日

19時半～

映画ブースで
上映開始!

ヒアラーズ1800

駆け

業量も多く、アートキャンプの三日前に三年生の有志で泊まり込み、作業をしてもらうミニ合宿もあった。使用ソフトを私しか持っていないものだった

が、きつと次に生かせるだろうと感じている。
今回はアニメーションという一秒にも美たないコマのためにとても神経を

自分たちの考えを信じる

今年の映像プログラムはいつたいたいどんなものだろう?

思いを遠らせながら、映像チームの学生を持った。

しかし一向に現れない。

さて、一体どうしたものだろう。

そう思いながら日々は過ぎ、いつの日

だったか、しっかりとした役割分担や

制作スケジュールが記されたペーパー

を持って、リーダーの学生が現れた。

なるほど。

自分たちで出来ることは自分たちで

進める。報告も忘れない。分からないこ

とは聞く。

それで良い。

相談してから進めるべきか、自分たちの

考えを信じて、ためらわず先に進める

のか。

どんな規模のプロジェクトであろう

と、一度や二度は、そういった判断に

出会う。

判断したことに責任を持つ気がある

のか、無いのか。それが全てだろう。

振り返れば、今回の映像チームは、そ

れぞれが意味ある自己判断の積み重ね

を行なったように思う。

さて、皆はそう思えるか、思えないだ

ろうか?

映像メディア研究室 担当 兼古昭彦
スタッフ
教員 兼古昭彦
助手 佐江彩乃
学生
三年 下山卓月(代表)
文念なつみ 石井雄
石井真緒 三宅美咲
二年 池田みつき 船戸美緒
山崎理沙 吉川玲那
一年 荒木渥 平村海
横川真美 渡部友樹子
新井美穂 梅澤月子
木村彩恵 佐藤比呂加

造形表現学科 三年 下山卓月

兼古昭彦(産教協)





この目で記憶する

準備期間と当日の各プログラムの活動を記録、それをアートとして展示した。

終了後は、参加者から募集した写真展を実施。

ドキュメンタリー

アートキャンプの一員として

昨年度までのドキュメンタリーの活動は、写真を通り記録することが主な活動だった。主な活動は裏方であるが、自分たちもアートをつくる一員として参加したい、また、準備期間で撮り溜めた写真を「展示」として、周囲に報告をしたと考えた。どのように展示したらアートになるだろうか。一つ一つの写真はそれぞれ意味を持ちながらも、全体をとらえたときに新たなアートとして意味を持つことができるモザイクアートを採用した。

各プログラムが方向性を決めて活動を始めると同時に、ドキュメンタリー内で担当を決めて記録していった。プログラムによって活動する時間や場所が異なるため、担当者が代表者と連絡を取りながら進めた。乗換のように当日まで作品を作るところもあったので、記録がないという事態にならないよう心掛けた。

モザイクアート

撮った写真はモザイクアートで使用した写真の何個もの枚数があるが、そのなかから選定して制作にあたった。

モザイクアート展示の際は、雨天に備え防水スプレーとひつつき虫の防水テストを行っていたので、当日の急な雨にも持ち堪えることができた。

モザイクアートをつくるのは思っていた以上に困難であった。約五七〇枚

の写真を選べることも自体も時間がかなり大変であったが、並べて全体をみたときに何を表しているのか伝わらなかつたら失敗に終わってしまう。作業中はとても不安であり緊張した。

写真の加工をせずそのままの色を使うというのはリスクもあったが、一つ一つの写真をみたときに、撮ったままの色の方が伝わるものも多いと考えそのまま使用することに決めた。

近くからだただ貼ってあるだけのようにみえる写真たちが、離れてみると、アートキャンプのロゴにみえたときは、本当に嬉しかった。はつきりとその形が分かるわけではなかったのが残念だが、外部の方に説明すると、「確かにみえるよ！すごいですね」と言っていたので暖まれる思いだった。

展示場所についても、ねらい通り多くの人に注目され、階段に写真がずらりと並べてある様子はインパクトがあった。

写真展の開催

写真の記録は、いうまでもなく私たちの仕事だが、参加者にしかわからない感動もあるはずだ。そんな個人の記録を集め、皆で共有する場をつくらうと考え、写真展の開催を決めた。集まった写真は、目立ったものはないものの、そ

AC事務局 担当 神元信幸
 スタッフ
 教員 神元信幸 田中千賀子
 助手 横江彩乃
 学生
 3年 石井菜緒 (代表)
 石井恵 山崎瑛理子
 下山草月 中多由香
 当日ボランティア
 牧野佳幸

造形表現学科 3年 石井菜緒

れぞれの思い、当日の雰囲気がよく伝わる素敵な写真だと思おう。また、当日は各プログラムにハンディカメラを渡し、自由に撮影してもらった。動画は編集し、様々な場面で今後の広報活動に使っていく予定だ。

記録を終えて

五人という少人数で、しかも全員が他のプログラムを兼業していた。忙しい時期が重なり、作業が進まずあせることもあったが、その分一人一人が仕事に責任をもって、無駄なく役割分担をこなした。映像プログラムと兼業しているスタッフが三名いたこともあり、担当の先生や助手さんに協力いただけたことも救いだっただけ。こうして記録が、モザイクアートとして形になったとき、アートキャンプのロゴがみえたとき、達成感で満たされた。はじめてアートキャンプに自分が参加していることを自覚することができた。



▲モザイクアート



▲ナナイチギャラリーで写真展開催



▲30分のビデオ制作・上映



準備期間と当日の活動を記録、それを展示した。終了後は、参加者全員に写真展を実施。

のなかから選定して制作にあたった。モザイクアート展示の際は、雨天に備え防水スプレーとひつつき虫の防水テントを行っていたので、当日の急な雨にも持ち堪えることができた。

の仕事だが、参加者にしかわからない感動もあるはずだ。そんな個人の記録を集め、皆で共有する場をつくらうと考え、写真展の開催を決めた。集まった写真は、目立ったものはないものの、そ



新生ドキュメンタリー

ドキュメンタリーチームは発足して二年目、フットワークが軽く、顔が利く、おちゃめで明るい学生たちが集まりました。

準備段階を写真にしてモザイクアートを制作することによって、「記録」をアートに繋げたことが、キャンプ参加型の新生ドキュメンタリーチームを生みだしました。

少人数で一人一人の作業量が多く、当日のメンバーは記録のため会場を走り回ります。

重い機材を背負い、雨のばらつくなかビデオを回す姿がすごく格好いい！どんな瞬間も逃すまいと奮闘しながらも、ワークシoppに参加してこの時間を楽しんでいくことが嬉しかったです。

また、当日の膨大な録画を短時間で構成・編集し、様々なトラブルを乗り越えて、報告会でビデオ上映できたことには本当にはっとしました。

今年も、モザイクアートで、ビデオで、「観せる」プログラムになりましたが、体力的にも精神的にも疲労困憊だったと思います。

でも投げ出さずにやり切ったことは、今後の皆にきつと活かされていくはず！

横江彩乃 (助手)

広報

アートキャンプの情報を発信していくことが目的である。
ロゴ、ポスター、DM、web、パンフレットの制作、
学生アナウンス（宣伝）、当日の受付を担当した。

デジタルデザイン研究室 担当 有馬十三郎
スタッフ

教員 有馬十三郎 宮本真帆

助手 辻澤久美子

学生

3年 山崎瑛理子（代表）

青柳希 伊藤歩 伊藤早紀 内海奈子

風巻美里 木村栞子 五藤利七海

片澤由貴子 高橋香菜 張替美帆

藤田愛香 三木愛子

2年 木村円香 青木仁美 阿部ひかり 齋藤祐子

1年 東海林直希 高橋杏奈

広田明日香 安田有希

造形表現学科 三年 山崎瑛理子

統一感を出す

ポスターとDMで工夫したことは、両方に赤が目立つ写真を使い、デザインを一つにしほったことである。何種類も制作してしまうと、アートキャンプのイメージがぶれてしまうので、一つに統一した。また目を引く色を使用することで、「なんだ？」と足を止めてみてもらえれば良いなと思い制作した。

意識したこと

ひろげるアートということ、制作物も全体的にひろがっていくような、おおらかなのびのびとしたものになるよう意識した。また、形や雰囲気を変え、私たちがしさができるようにした。今年は今までと比べて特に入数が多かったため、皆で集まって意見を出し合うのが難しかった。

web

最初は「昨年と同じではつまらない」という気持ちから、webを制作してみようかと考えた。紙媒体（アナログ）では伝えられる情報に限りがあるが、デジタルではリアルタイムに更新していけるので、アートキャンプの情報をより伝えていけるのではないかと考えた。

準備段階で各プログラムにインタビューをして紹介をし、ドキュメンタリーの方々との協力をして、アートキャンプ当日もリアルタイムでアートキャンプの写真をあげた。

当日に配布したパンフレットにもQRコードを掲載することができ、参加している皆と共有することができたのもよかった。はじめてとしては、上出来だったと思う。

造形表現学科 三年 片澤由貴子

ART CAMP



ART CAMP 2014 2012, 2013 others

サイト URL

<http://www.ac-kaseidai.com/index.html>

web制作

今回は参加学生の発案でwebサイトが立ち上がった。webデザインとは一種のシステムデザインであり、その実制作は良い経験になる。

実際のweb制作ではデザインワーク以前にコンテンツ作成が重要で、さらに広報活動であるため本体に先行して形にしなければならぬが、この点、担当した学生たちの意識は大変高く、特に工程管理に関して指導する必要がほとんどなかったことには正直に驚いた。

他のパートとの連携、遅れる工程の調整、マテリアルの変更に伴うデザインの再検討等々、実務同様の問題が起きるなかで、ほぼ計画通りに完成させたことには大きな価値がある。

当然だが課題も残る。アートキャンプにおけるwebサイトの役割の整理（外部への情報発信/内部運営のサポート）、タブレット・スマートフォンを含むマルチデバイス対応など、次回のアートキャンプで、今回の経験が引継がれ更に内容が深まることに期待したい。

宮本真帆（非常勤講師）





保育園の子どもたちと楽しみました

暑い日だったので暑さが和らぐ三時過ぎに、「かせい森のおうち」の子どもたちと先生方二十人で狭山アートキャンプに参加させていただきました。「かせい森のおうち」は平成二十六年四月に狭山キャンパスに新設された〇〇五歳児六十名の埼玉県狭山市認可保育園です。

カーンカーンという音を聞きつけた長児、「なんだ？」急に小走りに、それを見ていた三・四歳児も音のする方に走り競走ワークショップの前に到着、ピカピカと出る赤い光や鉄をたたく音などはじめて目にする風景に目を丸くしています。「熱そうだね」と言う保育士にしがみついたり、何だろうと草むらに入り確かめようとする興味津々な子など反応は様々でした。

造形表現学科のお姉さんに、「ペイントやハンモックもやってみたい」と声をかけられ創作広場のなかにおじやましました。草や石があり幼児には少し歩きにくい場所でしたがなんだろうかと目を輝かせて元氣よく踏み込んでいく頼もしい子が多かったのも発見でした。

お姉さんに抱っこで寝かせてもらい、はじめて体験するハンモック。せつかく寝かせてもらったのにすく降りたがり緊張した表情でした。

ペイントコーナーでは絵の具が付いて

もい服装で来なかったもので、ちょっとだけ参加。お姉さんたちがダイナミックに色にチャレンジする姿を食い入るようにみていました。

子ども同士で手をつないで帰る道すがら、「すこかったね」とでも話しているのか、いつもに増して楽しそうな表情の子どもたち。

アートには子ども、ひとの感性を引き出す力、脳を活性化する力があると信じている私です。

来年の狭山アートキャンプでは、かせい森のおうちの子どもたちともコラボしてください。

九月には造形表現学科の学生さん、先生方の愛情あふれる木製遊具が保育園に完成し、周囲の自然と融和した素晴らしい園庭になりました。心より御礼申し上げます。

君井朝江 狭山校舎担当理事



実感を大切にしない世界には、決して輝かしい未来はやってこない！

平成二十六年度、狭山キャンパスにおける夏は例年になく熱く燃え上がっていた。造形表現学科のアートキャンプと時を前後して、新設子ども支援学科のリーダー養成キャンプも実施されていた。

これら二つの活動展開には、一つの重要な共通ポイントが存在します。それは、「体験して感じる」と、身近なキャンパスの環境に全身全霊を込めて深く関わり「実感すること」なのです。じっくりと感じる・丁寧に感じる・優しく感じる・温かく感じる・おいしく感じる・熱く感じる・かつこ良く感じるなどなど。人それぞれに、学生それぞれに、参加者それぞれに汗を流し・工夫し・涙すること、怒ること、慰めること、笑うこと、うれしがることなどなど、こうした身近な環境にとっふりとたっふりと深く静かに浸かりつつ、身近な環境と一体となり生きることを「実感すること」、これこそが本当の生きる醍醐味なのです！こうした良質な活動の積み重ねこそが、彼の幼き日に彼自身を知る大きなきっかけとなるのです。「実感を大切にしない世界には、決して輝かしい未来はやってこない！」私は、アートキャンプに関わらせて頂き、このことを改めて実感した次第です。ありがとうございます。

うございました。さらに、来年はパワーアップしたアートキャンプを期待致しております！東京家政大学の輝かしい未来のために！！

大澤力 子ども学部子ども支援学科科員



はじめに体験するクッキング。せっかくだから寝かせてもらったのにすぐ降りたがり緊張した表情でした。

ペイントコーナーでは絵の具が付いて



を大切にしない世界には、決して輝かしい未来はやってこない！私は、アートキャンプに関わらせて頂き、このことを改めて実感した次第です。ありがとうございます。



アートキャンプ流しそうめん

今回のアートキャンプでは、流しそうめんに参加した。制作活動には無縁である身にとっては、適当な参加場所であったと思われる。麺類は好物であるので、家においても乾麺をゆでて食べることはよくある。麺を茹でることは日常生活の一部で、制作活動とは何ら関係のないことのようにも思えるが、多くの人に食べてもらうために茹でるとなると、作品制作とまではいかないまでも、いかにおいしく食べてもらえるか、つい身が入ってしまう。茹でることに集中するのである。この点においては、作品制作に通じるものがあろう。麺を茹でるといふことは、日常生活における行為である。日常生活に足を踏まえていないと、直ちにその行為に没入することは困難と思われる。日々きちんとした食事をとっているのか、生活の規範性のようなものが求められるのではなからうか。本来、アートキャンプでは学生が主体となり、すべてを学生が行うものであろう。流しそうめん班の学生は準備を確実に進めていた。しかしささげを茹でるとなると、いつ麺を鍋に投入するのか、茹で時間はどのくらいか等々、種々問題が生じてくる。日常の食生活での経験があれば、このような問題は容易に解決できる。残念ながら、学生にはこの経験が不足している。つい手を出してしまつたら、手放せなく



なつた。もっと学生に茹でてもらうべきであったと反省している。食生活は生活の基本で、あらゆる活動の根源となるべきものである。食生活が確立されていけば、諸々の活動が生彩を放つてくるといつても過言ではない。規則正しい食生活を望みたい。

若林繁 造形表現学科 教授

キャンプのお仕事

結婚したばかりのころ、義理の母は私の仕事をなかなか理解できなかったようだが、私が夏にはキャンプに、冬にはスキーにスノボにとびまわり、楽しそうにしていたからであろう。もちろん実習のため学生を引率指導していたのだが、長女も大学生になる頃まで私の仕事を友達にうまく説明できず、「木村さんのお父さんのお仕事は何?」と聞かれて「キャンプ」と答え、理解されなかつたそうだが、女房の同僚には、旅行業者かツアーコンダクターだと何年も思い込んでいた方もいる。キャンプやスノボが仕事となりえる選択はそれしかなかったようだ。

これらは、仕事が生産性、効率性が重要視されるのに対し、スポーツやキャンプが非生産的、非効率的な活動だからに他ならない。アートも同様な面があるように思われる。

そんなアートの祭典「アートキャンプ」が、今年準備段階からとてもスムーズに効率的にテキパキと運営されたのと感じる。各プログラムを担当された先生方も、昨年より当日のドタバタが少ないと感じてらっしゃるのではないかと昨年のアートキャンプよりもさらに良い成果をあげるために、運用上滞っていた部分を改善していただいたお蔭であろう。計画、運営がシステマティックになつただけ一定の成果が保障でき

る教育プログラムが整備されたといえる。学生は、そのシステムに乗ることによって成功に導かれ、良い成功体験が保障される。

しかし、それは教育プログラムとしての成功であつて、アートとしての評価はどうだろうか。もしかすると、システムを大きく逸脱するようなハチャメチャな学生の発想や行動から、大きなアートの成果が生まれるのではないかと、そう思つてしまうのは、スポーツのピッチグレイがいつも一般常識を大きく逸脱したところにある、アートにも同様だと感じるからである。大きく教育システムから逸脱する学生の暴走は、教育者には頭の痛いところだが、アーティストにはより大きな成果をもたらしてくれるかもしれない。先生が最後におっしゃっていた「台風の中でもやっていく君たちをみたかった」という言葉は、安全を守る教育者としては問題があるかもしれないが、アーティストとしては当然の要求だったのであろうと最近思い返している。

さて、教育プログラムとしてシステムは構築されつつあるなか、学生の爆発的な行動にも期待しつつ来年を期待したい。

木村博人 児童教育学科 教授



ART CAMP DATA

狭山アートキャンプ2014

▲ロゴタイプ



8/8 (FRI) - 9 (SAT) 東京家政大学 狭山キャンパス

▲ポスター版

2014年8月9日(金)～10日(土)

場所 東京家政大学 狭山キャンパス

主催 東京家政大学造形表現学科

授業科目 「総合表現」 / 「美術研究」

協力 児童教育学科 / 環境教育学科

狭山アートキャンプ2014は、造形表現学科の「学科教育強化費」、「教育研究費助・充実費」によって運営されました。

年間スケジュール

2月

- ・アートプロジェクト 参加希望者 狭山キャンパス見学

4月

- ・アートキャンプ 企画運営スタッフ募集

5月

- ・各プログラム企画書の確認
- ・全体の予定作成
- ・予算案検討

6・7月

- ・本格的な準備
- ・宿泊・備品準備と管理
- ・当日スタッフ募集・会計
- ・当日スケジュール詳細決定
- ・予算決定
- ・「アートキャンプ中間報告展」開催 於ナナイチギャラリー

8月

- ・スタッフ全員ミーティング
- ・当日
- ・最終ミーティング

10月

- ・報告会
- ・報告書作成開始

11月

- ・「アートキャンプ写真展」開催 於ナナイチギャラリー

12月

- ・報告書完成

学年	2013		2014		2015		
	スタッフ	参加	1期生	2期生	スタッフ	参加	
造形表現学科1年生	28	27	10	3	造形表現学科教員	29	9
造形表現学科2年生	25	25	13	0	他学科教員	2	1
造形表現学科3年生	58	46	0	0	行政職員	6	0
造形表現学科4年生	8	3	4	0	計	37	10
児童教育学科	3	1	教職員	0	3		
環境教育学科	7	4					
日本大学	18	17					
計	147	125					

▲スタッフデータ



▲タイムスケジュール



▲報告会

アートキャンプを一通りのイベントで終らせたいために、活動を記録すること、活動をふりかえること、そしてこれらの成果を多くの人々に伝える表現活動を重視しています。報告会や写真展の開催、個人レポートの提出、そして本報告書の作成など、積極的に取り組んでいます。

2014年8月9日

場所 東京家政大学

主催 東京家政大学

授業科目 「社会教育」

協力 児童教育研究センター

狭山アートキャンパス

科教育強化費、特別費

によって運営されました。

年間スケジュール

- 2月
 - ・アートプロジェクト 狭山キャンパス
- 4月
 - ・アートキャンパス 企画運営スタート
- 5月
 - ・各プログラム
 - ・全体の予定作成
 - ・予算案検討
- 6・7月
 - ・本格的な準備
 - ・宿泊・備品準備
 - ・当日スタッフ
 - ・当日スケジュール
 - ・予算決定
 - ・「アートキャンパス」ナナイチギ
- 8月
 - ・スタッフ全員
 - ・当日
 - ・最終ミーティング
- 10月
 - ・報告会
 - ・報告書作成開始
- 11月
 - ・「アートキャンパス」ナナイチギ
- 12月
 - ・報告書完成

アートキャンプを歓迎

当日、朝方降っていた小雨も止んで夏の空になっていた。これから始まる「アートキャンプ」を歓迎しているようだ。

狭山キャンパスは、この四月、看護学部と子ども学部が開学した。完成年度には八〇〇名の学生が学ぶことになる。二年前、同じ場所で「アートキャンプ」が実施された。そのとき、本部が置かれ、学生が宿泊したのは真新しい三階建てのセミナーハウスではなく、取り壊された平屋の食堂棟であった。狭山キャンパスから板橋キャンパスに至るまで、学生が買動する前のことではあるが、造形表現学科の学生が自然をキャンパスにして自由に作品、ときには迷惑な、ときには笑ってしまふような作品をつくっていたことを思い出す。

セミナーハウスの階段が見慣れない模様になっていた。よくみると写真だ。木々に布を巻きつけている。聞くところハノンモックを吊るといふ。樹もそんなことになるとは思っていなかったらう。緑の空間が、嚴治のテントが出来て、そうめん流しの竹が組まれ、上映のための布が張られ変わっていく。そのなかを色とりどりの服を着た学生が真剣にまた笑顔で動いている。今年もこの企画に参加した学生の良い体験となることだらう。本部の学生、サポートされた先生たちのご苦労に感謝し、この「アートキャンプ」が続くよう願っている。

小松原 狭山学務部

あとがき

アートキャンプ2014お疲れ様でした。今年もこの報告書の作成によって、ふり返りが出来たと思います。

アートプロジェクトでは、自己と他者、日常と非日常、理想と現実などの二項対立としての構図があります。それらのせめぎ合いから、学生にも予測できない創造力が芽生え、その創造力が少しずつでも現実の社会を変える力へとひろがることを願ってやみません。

末筆にはなりますが、ご指導頂いた他学科の先生と非常勤の先生方、そして助教・助手のみなさん、また、狭山の事務局の方々には大変感謝しております。そして学生のアンケートの中でも沢山の感謝の意見があったことをお伝えさせて頂きます。

AC事務局 押元信幸(准教授)

編集後記

今年のテーマ「ひろがるアート」を聞いたとき、視覚だけでなく触覚にも訴えるものにしたかったと考へた。表紙の紙は質感のあるものを選んだ。

また、私自身もひろがりを得ている。はじめてリーダーという役割を担い、人との繋がりをひろげ、深めること、同じ目標に向かって進む仲間を得たこと、頼り方が分からず、出来る範囲を一人で制作した最初の頃には想像していなかったことである。多方面からの協力も得て、ひたむきにPCに向かっていた日々は、きっと私たちの財産となるだろう。

最後に、この報告書を作成するにあたりご協力いただいた全ての方に感謝申し上げます。

造形表現学科 三年 中多由香



▲ スタッフ全員に配布した缶バッジ

AC事務局 担当 押元信幸
スタッフ
教員 押元信幸 田中千賀子
学生
3年 中多由香(代表)
風巻美菜 加藤明日香
佐藤仁美 佐藤文香
柳本優 森口真実那
2年 青木仁美 岡部ひかり
プログラムタイトルロゴ
山田ひとみ



2014.08.08(FRI)-08.09(SAT)

狭山アートキャンプ 2014 報告書

編集 狭山アートキャンプ 2014 報告書編集スタッフ
表紙絵 中多由香
発行日 2014年1月9日
発行所 東京家政大学造形表現学科
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
印刷・製本 株式会社エーヴィスシステムズ

